特集：公開セミナー

伊那谷における蝶類の動向

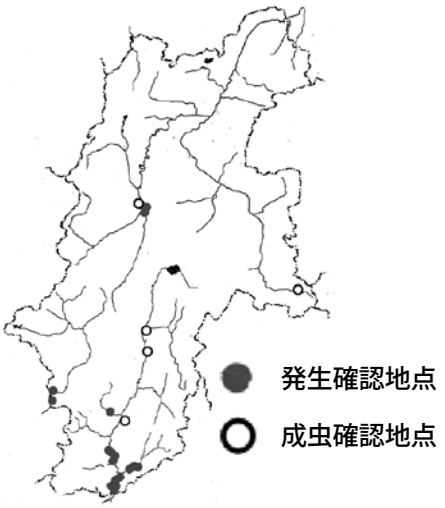
日本鱗翅学会信越支部長/伊那谷自然友の会会員　井原 道夫

温暖化にともなってこれまで記録のなかった暖地系のチョウも北上しています。また「偶産蝶」と呼ばれていたチョウが伊那谷で越冬できるようになり、分布域を拡大しています。分布域拡大にも種それぞれに個性が見られます。

ナガサキアゲハ　〔地域限定型〕

2003年9月17日に天龍村で後翅1枚を拾ったことが始まりです。その後途絶えることなく天龍村では9年連続して食樹であるユズで幼虫が見つかっています。天龍村以外では泰阜村・阿南町・旧南信濃村（現飯田市）での発生も確認することができました。2009年と2011年には木曽谷南部（南木曽町・旧山口村）での発生を確認することができました。木曽谷南部については伊那谷南部の環境と似た状況にあり、今後連続発生をする可能性が考えられます。

年2～3回の発生と思われますが、食樹であるユズの植えられている場所は限定されていること、幼虫は天敵の被害を受けやすいこと、寒さに耐えられず凍死するなどで爆発的に個体数が増えるということはありません。



ナガサキアゲハの確認地点

ツマグロヒョウモン　〔一気呵成型〕

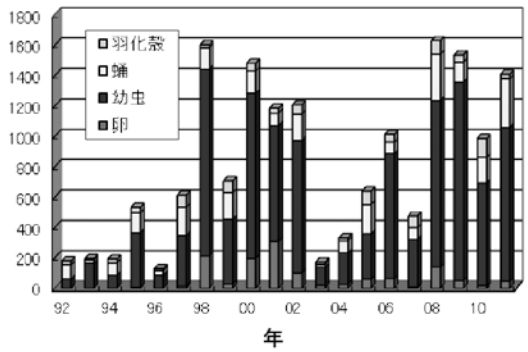
1990年代になって採集例は増加傾向にあった。1998年になって突如として多数の地点で、成虫の飛来と発生場所の確認を、さらに旧南信濃村での越冬を確認することができました。1999年の成虫発生量は前年を大幅に上回る大発生でした。以後急激に分布域は拡大し、数年で長野県内いたるところで成虫が見られるようになりました。年に4～5回の発生と食草であるスミレ類の存在が一役買っています。食草であるスミレ類がいたるところで栽培されていること、人家軒下などの人為的環境を利用することで越冬も可能となり、分布域を拡大することができたのです。

ツマグロヒョウモン

クロコノマチョウ　〔じわじわ北上型〕

1962年に泰阜村で8月に夏型が、9月に秋型が採集されました。これは同一場所での採集記録であり一時的に発生していた可能性があります。1978年になって天龍村で複数個体が目撃されました。この時期が伊那谷への定着の第一歩であったと思われます。

発生の確認ができたのは1980年のことです。1991年頃までは天龍村・南信濃村・泰阜村など極限られた場所での発生であったのですが、1992年には18市町村で、1995年には木曽谷で、2002年には34市町村98ヶ所で発生を確認できるほどになりました。年によって一進一退が繰り返されていますが、分布域は徐々に北上しています。これまでのところ長野県内で発生を確認できたのは伊那谷と木曽谷だけです。それ以外の地域での発生確認はできていません。成虫越冬であることから、冬の寒さが生存個体数に影響し、発生量・分布域の拡大を左右していると思われます。



クロコノマチョウ年別発生状況